



財団法人 京都市文化観光資源保護財団  
Kyoto Cultural Tourist Resources Protection Foundation

# 会報

も く じ

## 理事長挨拶

会員メッセージ「会報」発行100号に寄せて

寄稿

「後世への史跡継承のために  
——落柿舎の平成大修復」

財団法人落柿舎保存会  
理事長

中 井 武 文

特集

知られざる京都の文化財②  
久多の大般若経

京都市文化市民局文化芸術都市推進室  
文化財保護課技師

安 井 雅 恵

2010.11.1

100

## 保護財団の活動



# 『会報』発行100号を迎えて

財団法人京都市文化観光資源保護財団

理事長 山口昌紀

『会報』誌は、昭和47年（1972）の創刊号以来、本号で発行100号を迎えました。この間、設立記念誌の2回を含め38年間にわたり定期発行を続けることができました。これもひとえに関係各位のご支援、ご協力の賜ものとあらためて感謝申し上げます。

本会報創刊号には、発行の趣旨として巻頭に故 佐伯勇初代理事長が「この会報が全国の文化遺産を保存継承していく人々の共通の話し合いの場となるよう努力していきたい。」と述べておられ、又「この会報が、皆様方相互と事務局との交流の場としていきたい。」と記述されています。

この趣旨は、発行当時から今日に至るまで変わることなく編集方針として続け、これまでに京都の文化財や伝統行事、芸能などの保護と継承に日々取り組んでおられる各方面の皆様や学識者の方々などおよそ340名に及ぶ方々から貴重なご寄稿などをいただき、財団の活動とともに掲載してまいりました。又、会員の皆様にも誌面を通じて京都の歴史的文化遺産について、より一層造詣を深めていただけているものと存じます。

本財団におきましては、新公益法人制度のもと新たな組織に生まれ変わろうとしている今、本誌も100号を一つの区切りとして、財団及び本誌も決意を新たに、装いも一新して誌面の充実をはかりご期待に応えていきたいと念願しております。

又、創刊の原点に返り、会員の皆様との絆を深める役割を強く意識した誌面づくりに更に心がけていきたいと思っています。

終わりに、財団及び本誌にお力添えをいただいた方々に、深謝いたしますとともに、今後の活動につきましても、引き続き皆様方のご支援、ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

## 『会報』発行100号に寄せて

『会報』100号の発行を迎えるにあたって、  
会員の皆様から数多くのメッセージをお寄せいただき有難うございました。  
誌面をかりてお礼申し上げます。ここでは、その一部をご紹介します。

●会報100号おめでとうございます。諸先生方の文化財の解説、説明を拝見させて頂き、余にも京都の歴史、文化の深いのに我ながら未知の自分にはずかしい思いであります。

（片岡達子さん／京都市東山区）

●会報のご発行が、100号をお迎えになりますこと洵にご賀額のいたりに存じあげます。これまでの貴財団の並々ならぬご尽力に心からなる敬意を表します。今後とも益々のご発展、ご隆昌を祈念申し上げます。（難波江昇一さん／愛媛県西条市）

●会報100号おめでとうございます。会報で色々と深い勉強をさせて戴き又出来ない特別拝観のおかげで知らない京都の文化財を知り有難く感謝しています。（津田明子さん／京都市伏見区）

●京都で生まれ育っているながら京都の事を何も知らず恥ずかしい思いをして居りましたが会報や招待をして頂き色々を知ることが出来感謝しています。孫達にも色々教えてやれます。

（石井宏和さん／京都市西京区）

●毎号楽しく熟読させていただいています。益々のご活躍と皆様のご健康を祈念致しております。

（川本澄朗さん／京都市右京区）

●創刊100号おめでとうございます。遠方ですが、何か協力させて下さい。

（永津国明さん／静岡県静岡市）

●創刊100号を迎えられる事心よりお祝い申し上げます。益々のご発展をお祈り申し上げます。

（前川紀代子さん／兵庫県神戸市）

●100号になるのを記念して会報A4版にして一般新聞と同様程度の活字の大きさや写真を出来るだけ大きくして欲しいと思います。読み易くを期待します。（重道と男さん／京都府宇治市）

●歴史ある京都の街の有形、無形の文化財にはまだまだ知らない事が多々あり、会報を読んだり実際に見学させて頂いたり私にとって無形の財産を頂いております。

（太田千波さん／京都市伏見区）

●内容がうまく整理されているので、楽しく参考にさせてもらっています。

（藤戸浩二さん／大阪府枚方市）

●創刊100号おめでとう存じます。京都を離れて10有余年になりますが、貴誌を情報源として楽しみに読ませていただいております。

（出野秀彦さん／大阪府高槻市）

●100号！おめでとうございます。多方面からの奥深い京都の魅力を拝読出来ますのを楽しみにしております。（藤井享子さん／京都市北区）

●昭和53年1月会報No19より綴り込んでいます。いつも乍ら会報表紙写真は立派です。おめでとうございます。（柴山哲夫さん／京都市左京区）

●会報は、貴重な内容と読み易い量でとても有難いです。（奥山脩二さん／京都市左京区）

●もっともっと京都を知りたい私にとって楽しい会報で、写真も美しく嬉しいの一言です。感謝申し上げます。今後も楽しみにしております。

（林 直巳さん／京都市山科区）

●設立30周年記念特集号No78で、京都は文化的遺産を数多く所有し資源保護が重要でありますと投稿しましたが、平成12年寂光院本堂が放火され全焼する事件があり、重要文化財の本尊他3体が焼損しました。国民的財産の文化財を後世に伝えるためにも維持管理の重要性を痛感しております。（赤間義男さん／京都府向日市）

●会報創刊100号おめでとうございます。毎号貴重な記事を拝読し、勉強させていただいております。私達愛読者の寄稿も特集として募集されたら如何でしょうか。（山田順三さん／京都市伏見区）

●『会報』100号おめでとうございます!!父から受けついで会員になり色々な所を拝観できて感謝しております。（折杉富子さん／京都市北区）

●私がこの会報と出あったのは、上賀茂神社の特別拝観が実施された時のこと。すでに10年の経過です。これからも京都を愛して通いつづけます。

（北村敏郎さん／岐阜県大垣市）

## 後世への史跡継承のために

—落柿舎の平成大修復

中井 武文

## 去来と落柿舎

嵯峨野の中心に位置する落柿舎は、元禄の俳人向井去来が閑を養うために営んだ草庵であり、日本文学史上の大変重要な史跡として知られています。

去来は、京における松尾芭蕉門下の中心人物として、俳諧の古今集とも称される『猿蓑』を編み、また蕉風俳諧の真髓を伝える『去来抄』や『旅寝論』を遺すなど、大変活躍した人でした。

去来は慶安四年（一六五一）に長崎に生まれました。青年時代には剣術・柔術・馬術・軍学を学び、武芸の名声は九州に知れ渡るほどでした。遠祖が南朝の皇子に従ったという誉れ高い武門の出として、その血脈は去来の中にも息づいていたものでしょう。さらに京にあって学芸にも親しみ、有職故実、神道を学びました。

三十歳を過ぎた頃から俳諧の世界に入りましたが、すぐにその才覚をあらわし、蕉門第一の俳士として知られるようになりました。芭蕉も、その篤実真摯な人柄を深く愛し、「洛陽に去来ありて、鎮西に俳諧奉行なり」と称えて門人のなかでもとりわけ信頼をおいたのでした。

元日や家に譲りの太刀はかん  
鎧着てつかれためさん土用干  
鴨鳴くや弓矢を捨てて十余年

このような句に、勇士去来というにふさわしい面目がうかがわれます。

芭蕉の没後、一家を構えて名利に走る門人もあったなか、去来はそれを深く厭い、一人の門人も求めず、ひたすら師より伝えられた風雅の道を一身に保ったのでした。まことに

高潔の人でした。

さて、去来先生の落柿舎は、今から三百年以上も前、貞享二年（一六八五）の頃に構えられました。芭蕉も計三度ここを訪れ、嵯峨野の風情に寄り添い、くつろいだのでした。二度目はおよそ二週間も滞在して、名作『嵯峨日記』をしたためましたが、これが主人である去来の人物とともに落柿舎の名を高らしめたのです。現在の庵は、去来の没後六十余年後に再建されたものを濫觴としますが、長く「俳諧道場」として世々の俳人に愛され、大変重きを置かれました。その歩みは、初代庵主去来から現在の十五世庵主、伊藤桂一先生まで続いています。

現在も、芭蕉や去来を慕って、あるいはその萱葺き屋根の閑寂な風情と懐かしい趣きに誘われ、全国から人の訪れが絶えません。

## 落柿舎修復のあらまし

落柿舎は昨年平成二十一年九月、修復工事を無事竣工しました。当財団では、かつてない規模の大修復となりましたが、そのあらま



組上げられる新旧の木材（写真：上）と葺替えの様子（写真：下）

しは以下のとおりです。

落柿舎の庵は、全体的な緩み、柱や床の傾斜、壁の剥落などがみられ、萱葺き屋根の傷みも近年とみにはげし

くなっており、このままでは倒壊の危険もあるという専門家の指摘さえありました。

そこで、財団法人落柿舎保存会では、さまざまに検討した結果、その閑寂な趣を変えることなく修復を施すことを条件に、工事実施を決意しました。施工は、寺社建築において信頼と実績のある株式会社奥谷組、そして、萱葺き屋根の葺き替えは、先代から落柿舎の屋根を葺きつづけている萱金に依頼しました。工期は十カ月と長く、園内は狭いので、その間は閉門とさせていただきます。これも、保存会発足以来初めてのことでした。

着工の前に、落柿舎の立地や建物の構造上、風致や文化財保護に関する課題も山積していましたが、関係官庁と協議しながら一つひとつ解決しました。さらに、奥谷組と綿密な協議を重ねた結果、①萱葺き屋根はすべて葺き替える ②柱や梁、壁などはできる限り現在使用されているものを残す ③朽ちた床下の木材などは取替え基礎部分を補強する、という修復の方向性をしっかりと定め工事に取りかかりました。

こうして一昨年（平成二十年）十二月一日に着工、年内に測量や足場工事、萱葺き屋根の解体を終え、明けて平成二十一年正月早々、土壁を落し本格的な修復工事に入りました。

ところがその時、玄関入口付近から江戸末期の釘やカンナの跡が見つかり、現在の庵の



修復された萱葺きの屋根組（写真：左）と内部座敷（写真：右）



建築年代が推定できたことは、歴史的建造物の観点からも画期的なことでした。これが、財団法人京都市文化観光資源保護財団から助成をいただくことにもつながり、まことに有難いことでした。

それ以後、基礎工事を念入りに行い、五月に壁土・竹組みと荒壁の工事、六月には萱葺き工事と順調に修復は進行。梅雨の時期も素屋根で覆っていましたので大過なく工事は行われました。八月末には建具も入りほぼ完成に近づき、庭園の復元や修繕を行い、平成二十一年九月二十八日、無事竣工に至りました。

材木や壁土などを可能な限り再利用し、従来の趣を変えることなく復元するという当初の目的を、匠の技術により実現することができました。庵は、以後百年は問題なく保存できるとのことです。大切な史跡を後世に遺すという平成大修復の本願はこうして果たされました。

今後とも閑寂を旨とし、日本文学の大切な心を伝える地として、落柿舎護持に努めてまいりますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

（財団法人落柿舎保存会理事長）

※表紙に修復後の「落柿舎本庵」を掲載しています。

# 知られざる京都の文化財② 久多の大般若経

安井 雅恵

## はじめに

京都市左京区の北部、滋賀との県境に位置する久多は、五ヶ町からなる山あいの集落です(図1)。その歴史は古く、康平7年(1064)に法成寺領であったことが知られています。現在は過疎化が進み、住民の多くが高齢者となっていますが、古くからの習俗や儀礼は今に至るまで受け継がれています。とりわけ良く知られるのは「久多の花笠踊」(図2)でしょう。国の重要無形民俗文化財にも指定されている久多の花笠踊は8月24日の夜、志古淵神社に奉納される盆踊りの一種で、暗闇にゆらゆらと揺れる花笠が幻想的な風情を醸し出します。また、志古淵神社本殿や岡田家文書など、市の指定・登録となった有形の文化財も伝えられています。

今回は、これら同様久多に伝えられ、今年新たに市の文化財に指定された大般若経(図3)についてご紹介します。

## 長きに渡る調査

大般若経(「大般若波羅蜜多經」)は唐の玄奘三蔵が訳した600巻からなる大部の經典です。日本では奈良時代以降、国家安泰、除災招福などを祈願した転読が盛行し、現在でも広く行われています。

志古淵神社の宝蔵に納められていた久多の大般若経(以下、「本品」と略します)も、毎年8月10日に中の町の観音堂(通称普門閣)で転読されていました。「千日参り」と称して行われる転読の様子は、地元の女性たちが

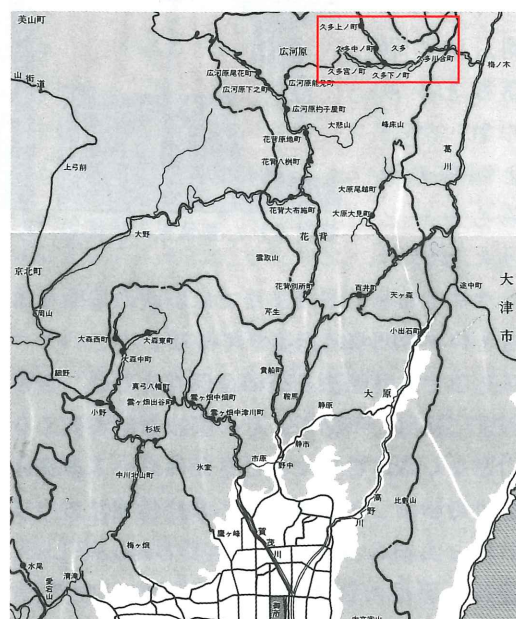


図1 久多地域(赤枠内)



図2 久多志古淵神社と「久多花笠踊」

執筆した『京都・久多一女性がつづる山里の暮らし』(久多木の実会編、ナカニシヤ出版、1993年)で、次のように記されています。「当

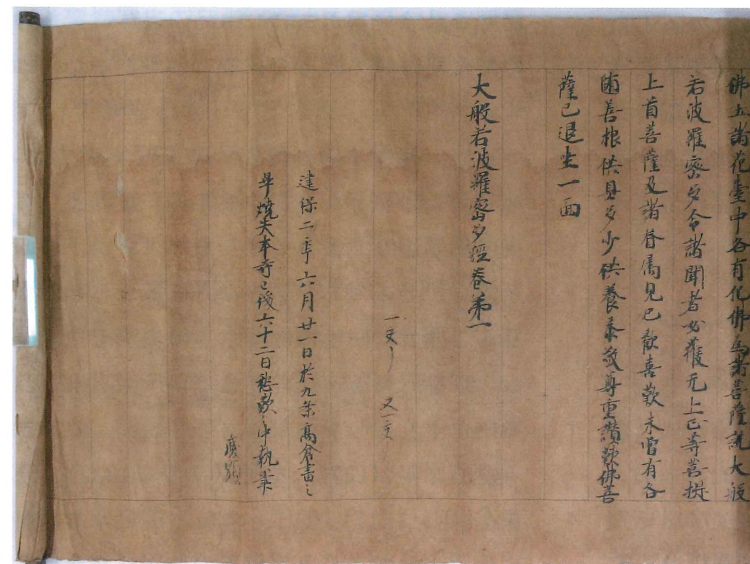


図3 久多の大般若経(巻1)



図4 志古淵神社宝蔵内の経櫃

日(筆者注:8月10日)、町内の人たちはお菓子や煮物などのお供えを持って、2時頃にお参りします。その時は600巻ある大般若経の中から40巻くらいの読経があります。(中略)読み終えた巻物を巻き返すのもたいへんでしたが、お参りの人たちが拝んだ後で有難く巻かせてもらいます。読経の後はお参りの人たちの持ち寄った物を広げ、お酒もあり、子どもにはお菓子があり、とても賑やかです。」この行事は現在も続いています。私は今年初めて拝見したのですが、読経後の雰囲気は和やかでうちとけたものでした。

京都市文化財保護課が初めて本品を調査したのは2003年のことでした。きっかけは本品を所有する久多自治振興会から受けた、大般若経の保存に関する相談でした。実物を確認するため久多に赴き、志古淵神社の宝蔵と観音堂を調査しました。宝蔵内には経櫃4合があり、これらに大般若経が納められていました(図4)。この時、建保2年(1214)の年記を発見し、他にも鎌

倉時代の奥書がある筆写本であることがわかりました。そのため、2回目の現地調査では、經典類に詳しい京都国立博物館の赤尾栄慶氏に同行、調査をお願いしました。その結果、本品は文化財として貴重であり、全巻に渡る詳細な調査が望ましいという所見を得たのです。しかしながら、本品は膨大な量で、長期の現地調査は様々な面から困難でした。また、志古淵神社の宝蔵は湿気が多く、文化財を保管するには問題のある状態でした。そこで、調査と保管を同時に行ってくれる博物館等へ寄託してはどうか、という話が持ち上がりました。ただし、本品を寄託することで、最も懸念されたのは千日参りの存続でした。それも地元の理解と協力の元、8月10日に里帰りさせるということで折り合いがつけました。その後、地元が独自に働きかけて、近在の寺院から大般若経を借りられる目途がたち、千日参りが続けられることになりました。

調査込みの寄託を受け入れてくれる博物館を探し、赤尾氏のご紹介もあって、2004年12月に大谷大学博物館への寄託が実現しました。大谷大学博物館では、宮崎健司教授が

主体となって全巻の詳細な調査を行って下さいました。2007年秋には、調査の中間報告に当たる「久多の大般若経」という展覧会が開催されています。その後も調査は続き、博物館への寄託から4年を経て、本品の全容が明らかにされました。

## 興味深い奥書～ 「久多の大般若経」の特徴

それでは、宮崎教授の報告書をもとに、本品の特徴を述べていきたいと思います。

本品は1巻（巻159）を欠くものの、599巻が伝存しています。書写奥書は鎌倉から室町時代のもので、年記がないものも、多くは本紙の様子から鎌倉時代と考えられます。料紙にしばしば押されている多宝塔印は大中小の3種類があり、それぞれの印が押された時代には隔たりがあるようです。

志古淵神社の宝蔵では、本品と木版摺の五部大乘経（卷子装）約200巻とが混交した状態で、経櫃4合に納められていたこともわかりました。経櫃4合のうち3合が白木、残りが塗りのものであり、白木のものにはすべて貞和2年（1346）の墨書が確認されています。すなわち、白木の経櫃が当初のもので、本品はこれらに納められていたと思われます。

本品の最も早い書写奥書は、巻1の建保2年（1214）のもので（図5）。そこには慶顕なる僧が九条高倉で書写したことに加えて「焼失本寺已後六十二日愁歎之中執筆」と記されています。ここで言う「本寺」は三井寺のことで、「焼失」は建保2年4月15日に比叡山の衆徒が三井寺に焼討ちをかけ、129字を焼失したことを指しています。つまり、慶顕は三井寺の僧ということになります。この他にも「三井良俊」や「智証門人天台末学」を名乗る長俊、「三井僧正道珎」という名前

が記される奥書があり、本品の書写に三井寺の僧たちが深く関わっていることがうかがえます。

また、建保4年（1216）の書写奥書では、顕祐という僧が、「八幡御宝前」安置として東山馬場辺りで書写したとありますが、この八幡宮がどこにあたるかは、はっきりとしません。他方、同年には清水寺の少別当や松尾寺（京都府舞鶴市）の覚命という僧も書写しています。

建治2年（1276）や建武4年（1337）、永正14年（1517）など、のちの年記のある書写は補写と考えられ、奥書のあり様からほぼ建保2～5年（1214～17）に書写が終了したと思われる。

また、底本として法成寺本、対校本として阿弥陀峯本、八幡宮本が挙げられています。このうち巻102で法成寺本を底本にしたと記す僧は「聖覚」と署名しています（図6）。この人物が、平治の乱で打ち果たされた信西（藤原通憲）の孫であり、「安居院法印」と称さ

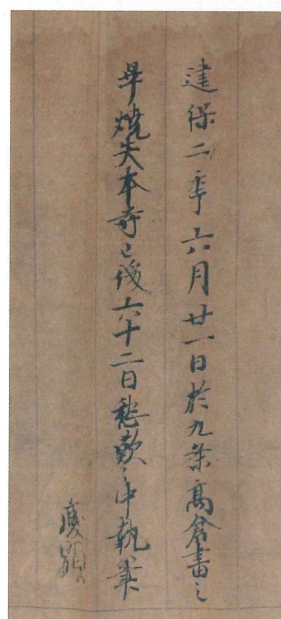


図5 巻1奥書

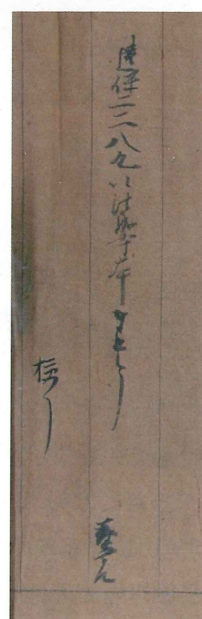


図6 巻102奥書

れた聖覚（1167～1235）ならば、本品は撰関家とも何らかの関係があったと想像されます。「安居院法印」聖覚は浄土宗の開祖法然の高弟で、洛北の里坊安居院に住いたことからその名で呼ばれます。法然には貴賤の隔てなく、多くの帰依者がありましたが、その中には九条兼実もありました。兼実の帰依は深く、自身の出家の戒師として法然を請じており、聖覚との交流を示す逸話も残っています。法成寺は周知の通り藤原道長が建立した撰関家ゆかりの大寺院です。一介の僧に法成寺本の筆写は許されなかったでしょうが、九条家との交わり浅からぬ聖覚なら、それもできたと思われるのです。

このように三井寺の僧や「安居院法印」聖覚とおぼしき人物などが筆写に関わった本品が、なぜ久多に伝わったのでしょうか。残念ながら、奥書にも久多伝来について記すものはありませんでした。ただ、経櫃には「奉施入山城國久多庄奉社 貞和二年九月四日」と記されており、少なくとも貞和2年には久多に納められたことが判明します。久多は貞和2年には足利家領でしたが、康平7年の時点では法成寺領であったことが知られています。法成寺との縁が久多伝来に作用したのかもしれませんが。

ところで、鎌倉時代に成立した本品を守るため、久多庄では適宜修理を行ってきたようです。本品には、その修補銘も豊富に記されており、延慶2年（1309）、永正14年（1517）、天文19年（1550）、天和3年（1683）の修理が確認できます。特に永正14年の修補銘には細かな修理費用が記されており、当時の修理のあり様がうかがえて興味深いものです。また、天和3年の修補銘は複数の巻に記されており、久多挙げての修復事業だったことが知られます。内容も多岐にわたっており、

「ナニコトモ修行ト思イシフリセバ心ニカル事ノ葉モなし」などという道歌的な文言も見られ、当時の人々の心象も吐露されているようです。大社寺ではなく、山あいの集落の人々が私財を投じて、本品を修復し守ってきたことには大きな意義があります。

## おわりに

調査を終えた本品は、現在も経櫃とともに、大谷大学博物館に寄託されています。ずいぶん傷みも出ており、紙継ぎ部分の糊が離れて断簡化が進むなど、状態は決して良好とは言えません。久多に伝来して650年余り、地域で大切に守り伝えた文化財をできるだけ良い状態で後世に渡すことが今後の課題と言えるでしょう。

（京都市文化市民局文化芸術都市推進室）  
文化財保護課技師

## 保護財団の活動

### 2010 年度 助成事業

本年度の助成事業は、これまでに各分野の申請受付を行ったところ、文化財所有者、管理者等の行う文化観光資源保護事業9件、伝統行事、伝統芸能の保存及び執行事業62件、文化観光資源をとりまく自然環境の保全及びその整備事業、文化観光資源施設の整備事業各1件で計73件となりました。主な事業としては、黄梅院（京都市北区）の書院修理事業、禅林寺（京都市左京区）の小方丈修理事業、十念寺（京都市上京区）の書院襖絵紙本墨画「雲竜図」修理事業などの助成申請がありました。事務局においてこれまでに行いました現地調査、写真記録、収集資料などの内容をもとに当財団の文化財専門委員会で審議いただき助成対象を選定いたします。



黄梅院…書院修理事業



十念寺…書院襖絵紙本墨画「雲竜図」修理事業

### 名勝「雙ヶ岡」の樹木整備を進める

京都市から管理を受託しています「雙ヶ岡」（京都市右京区御室）は、昭和16年に国の名勝に指定され、現在は名勝公園として多くの人達に親しまれており又、丘内には、アカマツ、ナラ、ソヨゴ、コナラ、サクラ、モチツツジなど数多くの種類の樹木が生育しています。これまで、名勝公園として常に良好な緑地を維持していくため、樹木の管理やアカマツの植林などの整備を毎年計画的に進めています。近年マツ枯れの進行が進み、今年は特に異常気象などもあって樹木の枯損、倒木などの被害が数多く発生していることから景観保全と園路・散策路利用者の安全を期すため、危険木・枯損木の伐採や枯れ枝・支障枝の剪定などの作業に精力的に取り組んでいます。



名勝「雙ヶ岡」で行う枯損木の伐採

### 平成22年度「文化財保護の巡回よろず相談」を共同で実施

去る10月1日、京都市域の文化財所有者・管理者を対象にした文化財の修理や補助金、貸付制度等の相談を無料で応じる「平成22年度文化財保護の巡回よろず相談」を、財団法人京都文化財団の主管のもと関係機関7者により共同で実施し、当財団の助成制度について参加者に詳しく照会しました。

## 事業のご案内

### ■2011年版 京の文化財卓上カレンダー

◆テーマ：京の名庭

◆規格：11.9 × 13.8cm（CD ケースサイズ）・14枚組（表紙・'12年12カ月含む。解説有り。）

◆内容：表紙 桂離宮庭園／1月 二条城二之丸庭園／2月 天龍寺庭園／3月 本願寺滴翠園／4月 龍安寺方丈庭園／5月 平安神宮神苑／6月 醍醐寺三宝院庭園／7月 三千院有清園庭園／8月 知恩院方丈庭園／9月 西芳寺庭園／10月 成就院庭園／11月 修学院離宮庭園／12月 仁和寺庭園

※会員の皆様には、進呈いたしますのでお申込みは、不用です。なお、会員以外の方や会員で2部以上をご希望の方は、1部500円（税込・送料別・多数の場合は割引有り）で実費頒布もいたしますので、事務局までお申込み下さい。



### ■京の文化財探訪

#### 紅葉の庭園と文化財建造物の特別公開

#### 「霊鑑寺」・「廣誠院」

#### ◎「霊鑑寺」の文化財特別公開◎

◆日時：11月19日（金）～30日（火）

10時～16時（受付は、15時30分まで）

◆参観料：700円（文化財保護協力金）

◆所在地：京都市左京区鹿ヶ谷御所ノ段町

#### ◎「廣誠院」の文化財特別公開◎

◆日時：11月20日（土）～24日（水）

10時～16時（受付は、15時30分まで・

12時～13時の間は受付休止）

◆参観料：700円（文化財保護協力金）

◆所在地：京都市中京区河原町通二条下ル東入  
上記の事業では、案内・説明など「京都の文化財を守る会」ボランティア部の皆さんにご協力いただきます。

※会員の皆様には、すでに本事業のご招待状をご送付していますので、是非お越しください。

### ■第41回京の郷土芸能まつり

#### —京の四季に織りなす郷土芸能—

◆日時：2011年2月27日（日）

開演 14:00（公演時間 2時間30分）

◆会場：京都会館第2ホール

（京都市左京区岡崎）

◆料金：2,000円（1階・座席指定）

◆出演芸能：木遣音頭と鉦始め、玄武やすらい花、京都祇園祭「函谷鉦祇園囃子」、梅津六斎念仏、八瀬赦免地踊、特別出演 京舞井上流

※会員の皆様には、料金2,000円を1,500円（1階・指定席）にてご優待いたします。（但し、お1人2枚まで。）ご希望の方は、1月10日までに事務局までお申込みください。



梅津六斎念仏



京都祇園祭「函谷鉦祇園囃子」

### お知らせ 京の文化財グッズを作製

#### “京都・文化財ダイアリー（2011年度版）オリジナル手帳”

会員の皆様にご愛用いただき好評のオリジナル手帳2011年度版を作製します。11年度（4月～3月）のカレンダー・メモと別冊には、京都の文化財を鑑賞いただく際に活用出来るように毎年新たな内容で掲載することにしてい

ます。本手帳は、会員の皆様の方に配布しているもので、来年2月に送付させていただきます。

又、本年度はこの他にも京都の文化財愛護をアピールする“ピンバッジ”や京都の文化財などを紹介する“ペーパーコースター”を今回は障壁画や屏風絵をモチーフに取り入れ作製することになっています。京の文化財グッズの作製は、皆様により文化財を身近に感じていただき、ご利用いただくことで当財団の事業活動への支援、協力の輪を更に広げていくことを主旨にしています。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

### 会員皆様のご投稿などお寄せ下さい

事務局では、会員の皆様方の声を大切にしながら活動を充実させていきたいと思っています。京都の文化財に関するお便り、思い出の写真や当財団の事業活動、会報などのご意見・ご感想、ご提案、会員皆様方同士の呼びかけや交流などの内容を、気軽にお寄せ下さい。インターネットホームページ会員専用サイトで掲載させていただきます。

※写真は、プリントしたものにコメントを添えてお送り下さい。(お一人1点)

### 京都の文化遺産を守り伝えるための募金に —皆様の更なるご支援をお願いします—

当財団では、皆様からの募金を京都市文化観光資源保護基金にして、京都の文化観光資源の保存修理や伝統行事・芸能の保存執行などに対し助成事業を行っています。

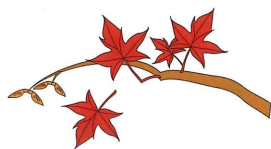
事業活動を今後とも維持発展させていくため、皆様からの追加募金や新規募集の呼びかけになお一層のご支援・ご協力をお願いします。

※お知り合いの方で入会をご希望される方がおられましたら活動を紹介していますパンフレットなどをご送付しますので、事務局までご連絡下さい。

### —おことわり—

会員招待事業としてご案内しています「京の三大祭—葵祭・祇園祭—」は、来年2月頃に他の事業案内などとあわせて皆様にご案内申し上げます。

### 編集後記



◆創刊以来本号をもちまして、100号を迎えることが出来ました。これまで会員の皆様をはじめ多くの方々にご協力を賜わりあらためて厚くお礼申し上げます。この100号を契機により一層皆様にご愛読いただけるよう事務局一同取り組んでまいりますので、今後ともご支援、ご協力をよろしくお願い致します。又、100号の発行にあたり、会員の皆様から数多くのメッセージをお寄せいただきました。編集の都合上、すべてをご紹介させていただくことが出来ませんが、紙面を借りてお礼申し上げます。

◆皆様もよくご存知の京都市右京区嵯峨小倉山にあります『落柿舎』の修復工事が、昨年度行われました。本号では、財団法人落柿舎保存会の中井武文理事長からご紹介も兼ねて寄稿いただきました。皆様も新しく修復された『落柿舎』をぜひお訪ね下さい。又、特集の「知られざる京都の文化財」2回目として、安井雅恵京都市文化財保護課技師から今回京都市文化財に指定された京都市左京区久多に伝わる『大般若経』について、長きにわたった調査過程とともにご紹介いただきました。山あいの集落の住民の方々が、これまで私財を投じて守って来られたご苦勞に大変敬服いたします。

### 会報

No.100

2010.11.1

会報題字／理事長 山口昌紀

表紙写真／落柿舎本庵

撮影 神崎順一（写真家）

編集・発行／財団法人京都市文化観光資源保護財団  
〒606-8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13 京都館内  
URL <http://www.kyobunka.or.jp>

TEL：075(752)0235 FAX：075(752)0236